



(三木家住宅付近からの眺望)



(秋の紅葉と三木家住宅)

国指定重要文化財 三木家住宅

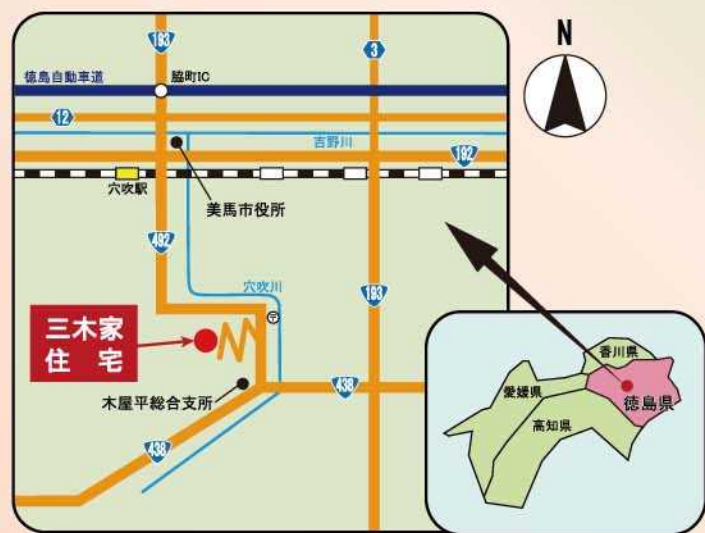


(満開の桜と三木家住宅)

三木家住宅付近は標高五九〇mの山の上なので見晴らしが良い。東の方角、眼前には穴吹川を挟んで標高一〇九〇mの山容の整った東宮山がある。その右裾尾根は天行山へと続いて四季おりおりの、そして朝夕に変化する風景を見せてくれる。

(『改訂木屋平村史』より抜粋)

アクセスマップ



交通アクセス

- マイカーをご利用の場合
徳島自動車道脇町ICから約60分 (約31km)
 - タクシーをご利用の場合
穴吹駅から約50分 (約28km)
- (所要時間は、道路状況等により異なります)

お問い合わせ先

- 美馬市教育委員会
徳島県美馬市穴吹町穴吹字九反地5番地
TEL (0883) 52-8011
FAX (0883) 53-8890
E-mail bunsपो@city.mima.lg.jp

- 美馬市木屋平総合支所
徳島県美馬市木屋平字川井161番地
TEL (0883) 68-2112

美馬市
美馬市教育委員会



三木家住宅

間取りは全国でも例のない整型八間取りで、棟通りで部屋を前後に分け、それぞれがドマ部分を含め5つに区切られる。当初は、西側の間口2間のダイドコロドマと床上の8室であったが、現在は、西側より2つ目前面の部屋がドマに改装されている。座敷は鍵座敷となっており、家の北東隅には、テングノマ（別名イラズノマ）という主人しか入れない部屋がある。

建築年代が江戸時代初期と推定される古い建物であるが、大黒柱はなく、太さ17cm角で、はつり仕上げの太い柱が全体的に使われている。また、壁が少なく、窓や出入り口などの開口部を多くとっており、なかでも前面と上手側面はすべて開口部になり、建



屋根裏



座敷

三木家住宅

三木家住宅は、三木山の頂上近く（標高552.36m）に建つ。箱入りの棟札は腐朽して判読できないが、江戸時代初期の建築と推定される徳島県内で最も古い民家である。

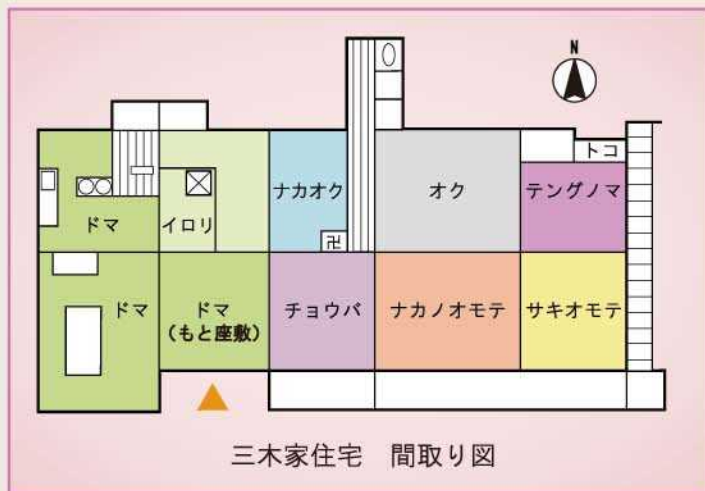
建物は南に面し、桁行22.2m、梁間9.3mの、民家としては大規模なものである。屋根は、茅葺き寄棟造りで、南面・西面および北面に亜鉛引鉄板葺きの庇がつく。



柱

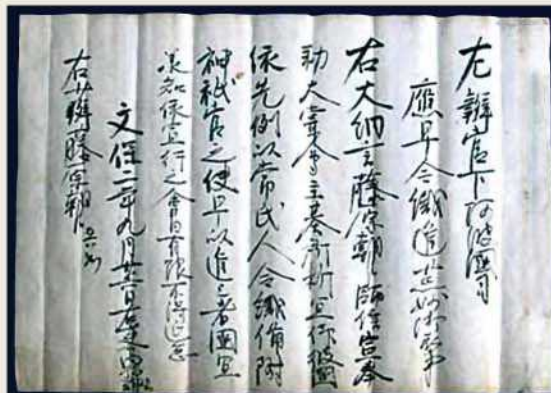
具が入っていることが特徴である。

三木家住宅は、保存状態が良い大規模な民家であり、中世山岳武士の系譜を引く家の遺構としてきわめて価値が高いため、昭和51年2月3日に国の重要文化財に指定された。



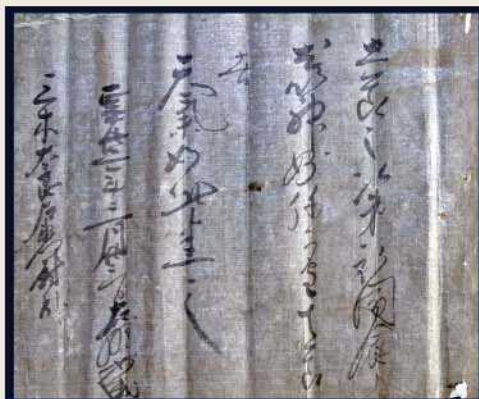
「太政官符案」文保二年九月二十六日

後醍醐天皇の大嘗会に関するもの。勅使僉服御衣使が神部2人をつれて阿波国に下向する旨を太政官から阿波国司に申し下した官符（公式の命令書）の写し。



「官宣旨案」文保二年九月二十六日

後醍醐天皇の大嘗会に関するもの。「天皇の命を奉ずるに、先例に依って常の氏人をもって僉服の御衣を織らせるように」といった内容の官宣旨（弁官が発給する下文形式の公文書）の写し。



「後村上天皇諭旨」正平二十二年三月二十三日

太郎左衛門尉（三木重村）の南朝への忠節に対する感状の諭旨（天皇の命令などを受けて側近が発給した文書）。料紙は宿紙という再生紙を使用しているため、薄墨色をしている。

三木家の歴史

三木家は阿波忌部氏の直系で、三ツ木という地名に由来する苗字を名乗っているが、「忌部」姓が三木家の本姓である。上古以来、歴代の踐祚大嘗祭（天皇即位の儀式）の折りに御殿人として僉服（※）を調進し、朝廷と深いつながりを持っていた。

三木家には、鎌倉時代から室町時代にかけての古文書「三木家文書」（徳島県指定有形文化財）が伝えられている。国衙領種野山の在地関係や、踐祚大嘗祭のときに使用される僉服の調進関係の文書、細川氏など支配層からの感状類など、45通からなる古文書で、中世阿波の山間村落の支配のあり方や、住民負担の状況などについて詳しく知ることができる貴重な資料である。

この古文書によると、三木家は鎌倉時代末ごろには地元の有力氏族として武士団を率いていた。特に南北朝時代には、南朝方に忠誠を尽くした山岳武士の一人として数えられている。また、江戸時代には名字帯刀を許され、三ツ木村の御目見得庄屋役を務めた。

（※）僉服：麻の繊維で織られた織物のこと。

平成の大嘗祭については、三木家資料館をご観覧ください。